

萬翠荘の立地と庭園

はじめに 萬翠荘は、愛媛県松山市の中心地、松山城の建つ勝山南麓に在する。鉄筋コンクリート造のフランス・ルネッサンス風建築で、設計者は木子七郎である。当初、旧松山藩主家の久松定謨は、別邸として萬翠荘の建設を計画したが、皇太子摂政宮行啓に際し、ご滞在所とするために建設を急がせ、大正11年（1922）11月に竣工した。大正14年の定謨の引退後は本邸となり、皇族などの滞在所としても度々使用されたほか、社交の場として各界の名士が集ったという。戦後は米軍の将校宿舎となるが、昭和29年（1954）以降は愛媛県の管理となり、愛媛県立郷土美術館として開館した。昭和54年（1979）に愛媛県立美術館分館に名称を変更し、現在に至る。昭和60年（1985）には愛媛県指定文化財に指定された。建造物研究室では、萬翠荘の建築史的価値を裏付け、今後の保存・活用計画の基礎資料とすることを目的に、2010年度の受託事業として調査をおこない、『萬翠荘調査報告書』（愛媛県教育委員会、2010年12月）としてまとめた。本稿では特に萬翠荘の庭園について、その立地的特徴と構成・意匠を報告する。

立地と築造年代 萬翠荘は、城山の南麓の谷部を段状に造成して確保された平坦地上に立地する。上段・中段・下段からなり、標高差の大きい敷地西半の崖面には切石布積の石垣が構築される。庭園は、上段の本館前庭、中段の池庭とそれに取り付く上段・下段の流れ、そして本館背後の愚陀仏庵周辺からなり、下段から上段まではつづ

らおりの道路によって連絡される（図45・47）。築造年代は、萬翠荘が建設された大正11年（1922）である。土地の造成にあたっては、家老屋敷時代に掘削されたと伝えられる近世の井戸が上段に残ることなどから、概ね近世の地割を踏襲したと考えられる。作庭者は不明だが、バラの栽培を趣味とし園芸に造詣の深い人物であった当主の久松定謨の意図が反映されたとみられる。現在の萬翠荘庭園は、その後の萬翠荘の利用変遷にともない、幾度かの改修を経ている。古写真や工事関係資料からわかる大きな改修には、年代は不明であるが、中段の西1/3を埋め立て上段を東に拡張したとみられる工事と、愛媛県立美術館分館となった翌年、昭和55年（1980）の庭園改修工事がある。

本館前庭 本館前面のテラス状に張り出す土地につくられる。本館からの眺望と、松山市街から本館が仰ぎ見られる配置を意識した正面性の高いつくりである。本館玄関ポーチ南の車廻しには、主景木としてソテツが植栽され、本館正面左右にはヒマラヤスギが列植される。ヒマラヤスギは、明治12年（1879）頃に渡来し¹⁾、明治後期以降に公園や洋風庭園に好んで植栽された樹木である。これらヒマラヤスギとソテツが、建物の外観と一体となって本庭園の顔となる景観を構成している。車廻しの南側は、昭和55年（1980）の改修工事によって全面が芝張の開放的な空間となった。古写真にみる当初の前庭は、芝地に魚子垣で仕切られた園路を設け、既存のマツやサクラを活かしつつ、点々と刈り込みの低木が配されるものであった。既存樹や近世の石組井戸など、萬翠荘建設以前の要素を残しながら、新たな植栽を導入することで、洋館のたた



図45 敷地全景（南東から）



図46 中段現況（南東から）

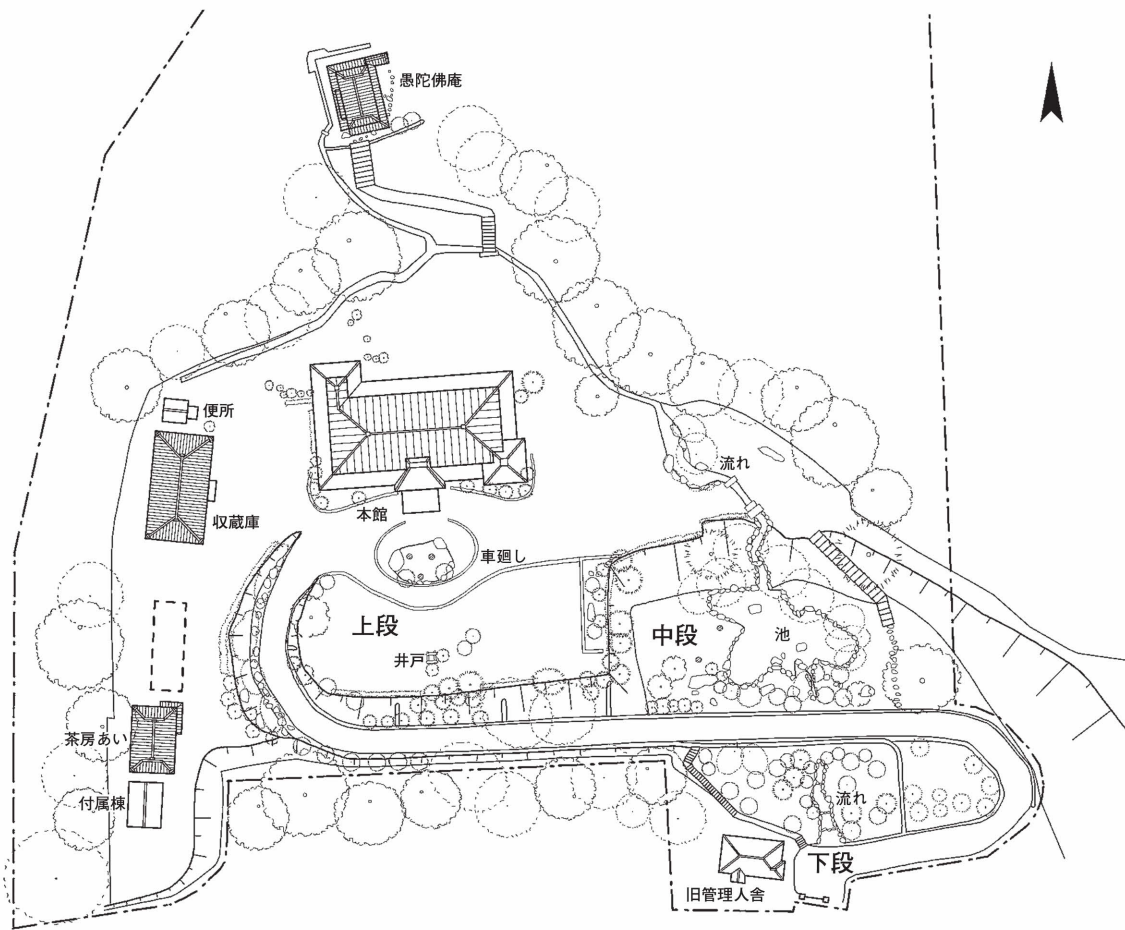


図47 萬翠荘敷地配置図 1:1000

ずまいにあう空間として調和を図ったものとみられる。池庭と竣工当時の庭 中段の池庭には、上流・下流にそれぞれ流れが接続する。流れには常時水はなく、雨水を上段本館背後の山裾に沿って設けられた流路に集め、上段東部の流れ、滝を經由し、中段の池に溜める。そして池尻から東西道路の下に通る暗渠に排水され、中段・下段の間の斜面地の流れに導かれる。滝石組は水落石に高さ約2.2mの一枚石を豪快に使用し、滝口部分は黒色モルタルにより水流の調整をおこなう。池は出入りの多い曲池で、護岸は角の取れた自然石によるコンクリート練積、池底はコンクリート袋打ちである。

大正14年(1925)の古写真によれば、中段は現在よりも西側に広く確保され、その西半には整形式の花壇が造られていた。花壇の縁部には株立ちの針葉樹が囲むよう配置され、青銅製のモニュメントや杯が置かれる。中段からみた本館との取り合わせを意識し、「純洋風」として造られた花壇とみられる。現在も滝石組の西にヒマラヤスギの巨木があり、かつての洋風庭園の名残とみられる(図46)。

この花壇と池庭とがどのような関係にあったのか、古写真からは判断できない。しかしこの敷地は城山の谷部にあたり、雨天時には相当の雨水が集まることから、萬翠荘建設当初より何らかの雨水排水施設が整えられてい

たと考えるのが自然であり、それを意匠化し庭園としていた可能性は高い。また萬翠荘敷地に南接する山裾の地に、復元整備された近世の池庭「翠水園」と、発掘調査で確認された近世の池遺構(番町遺跡)が存在する。萬翠荘中段の池の護岸や滝石組の施工方法から、現在のような形に整えられたのは近代といえるが、立地的な必然性や周囲の近世の池遺構との関連から、池の掘削自体については近世に遡る可能性がある。

まとめ 明治から大正期の洋館のある邸宅において、高低差をもつ地形の上段に洋館を構え、下段の低地に池を設けるという庭園の配置形式がみられるが²⁾、本庭園もこれらの地方での事例の一つといえよう。また、洋風の花壇設計や花卉栽培は、洋風庭園の作庭に関する書物が増加する明治末期以降に一般化へむかうが、竣工当初の整形式の洋風花壇は、その配置や意匠の実際を示す。また本館正面の景を構成する車廻しのソテツやヒマラヤスギは、洋館に調和するものとして採用された樹木とみられ、当時の洋風植栽観がここに窺える。(高橋知奈津)

注

- 1) 上原敬二『樹木大図説(一)』有明書房、1985。
- 2) 粟野隆「古河家の邸宅と旧西ヶ原本邸の庭園」『日本庭園学会誌』21、2009。